

2017 年度第 11 回物学研究会レポート

「伝統産業をクリエイティブ産業へ」

細尾真孝 氏 (株式会社細尾 常務取締役、GO ON メンバー)

八木隆裕 氏 (開化堂 6 代目、GO ON メンバー)

2018 年 2 月 13 日



日本の伝統工芸に新しい動きが見えはじめています。そのひとつが、京都で結成された GO ON です。西陣織の「細尾」や茶筒の「開化堂」など、6 社で結成、伝統に裏打ちされた技術や素材を活用しながら、国内外の企業やクリエイターに新しいものづくりを提案し、チャレンジしているユニットです。今回は GO ON から、細尾 12 代目の細尾真孝さんと開化堂 6 代目の八木隆裕さんのお二人に、GO ON の活動と日本の伝統産業の可能性や未来について語っていただきました。

以下、サマリーです。

「伝統産業をクリエイティブ産業へ」

細尾真孝 氏（株式会社細尾 常務取締役、GO ON メンバー）

八木隆裕 氏（開化堂 6 代目、GO ON メンバー）



01 : 細尾真孝 氏
八木隆裕 氏

■開花堂 苦勞の絶えない職人の道

黒川 よく来てくれました。このお二人は僕の 20 年来の知り合いです。みんな今日のお話を楽しみにしております。簡単にお二人の背景を説明します。西陣はジャカード機を海外から輸入して発展した歴史があり、帯を得意としていましたが、細尾はそれを広幅にして世界に向けてチャレンジしました。開化堂は、お茶を入れる缶をつくっていますが、この蓋がスーッと閉まるのです。これが実に気持ちいい。缶と缶の蓋がピシッと決まる感覚は日本の美意識、それも美的なものでなく、体感する美意識を感じさせます。日本の伝統の歴史に、新しいことが次々と起きているお話を伺いたいと思います。

八木 皆さん、こんばんは。開化堂 6 代目の八木と申します。今日は細尾さんと来ていますが、最初に 30 分ほどお話をさせていただき、細尾さんにバトンタッチし、そのあとに GO ON の話をしたいと思います。

まず開化堂についてお話いたします。平成 30 年は明治元年から 150 年目なので「明治 150 年」と言われていますが、開化堂は明治 8 年に始まり、文明開化から開化堂と名付けられました。イギリスからブリキを輸入してお茶筒をつくったのが始まりです。蓋と本体の継ぎ目を合わせると蓋がスーッと下がってくるのが特徴で、一個一個、手でこしらえています。1 個つくるのに 130 の工程があります。毎日手で触っていると変色し、100 年以上使い続けると黒く、独特の艶を得ます。その当時に購入してくれたお客さんが修理に持って来てても対応できるように、つくり方も全く変えていません。100 年以上前のものを未だに使っていただけるというのが大きな特徴です。

祖父の時代は、苦勞が絶えなかったと聞きます。第二次世界大戦があり、材料の銅やブリキ、真鍮はとても入手することなどできず、道具の鉄すら供出させられ、まさに食うや食わずでした。祖父は裏でこっそりお茶筒をつくっていたら憲兵に見つかり、逮捕されたこともあるそうです。でも戦争が終われば絶対にまたつくれるようになると思い、道具は半分だけ供出し残りは土に埋めてやり過ごしていました。ところがいざ戦争が終わると、機械で製造された製品が大量に入って来たのです。その時、日本人は、機械製品はいいものだ、手づくりなんて古臭い、とってしまったのです。戦後はお茶筒がつかれると思っていた祖父は、日本人の感覚がそのように変わってしまったために、大変な苦勞をしました。そこで薬屋と茶筒づくりを営みながら、なんとか諦めずに続けてきたのです。

先日、一枚の写真を見つけました。祖父と曾祖母が展示会をしている写真です。祖父とは仕事の話をしたことはないのですが、こんなことをしていたとは知りませんでした。これは今僕が、ミラノ・サローネやメゾン・エ・オブジェに出展しているのと同じようなことで、場所こそ違えど祖父も同じことをやっていたんですね。その時に感じたのは、僕は直接、祖父から教わってはいませんが、日常の中で開化堂らしさを教わっていたのではないかと、いうことでした。僕は 3~4 歳の頃から工房に入り、祖父の膝の上に座って邪魔をしていたらしいですが、その膝の上で得た感覚というのが実は大事なのだと思い始めています。

■反対を押し切り海外進出

大学時代、父からは「こんな伝統工芸なんか、あかんようになる。自分の代で会社をたたむ」と言われていました。そんなある時、僕がたまたま働いていた店で、うちの茶筒を買いにアメリカ人の女性が来られたのです。そこでこの茶筒をどうするのかと尋ねたら、「キッチンで使いたい」と返ってきた。その時、「あー、これだ」と気付きました。家で、普通にキッチンで使う。これならば、日本だけでなく海外でも売れる。家に帰り、早速父に「跡を継ぎたい。海外で売りたい」と言ったら、父は「アホか。これは日本のお茶筒やで。こんなの外国の人がわかるわけないやないか」と反論されました。「わしは海外では売れんと思うけど、職人になるんやったら、まずはつくるのを覚えなさい」と諭され、そこから 5 年ほど修業しました。

その修業開けの 5 年後ごろに、ロンドンにある話題の店の「ポストカード・ティーズ」から声を掛けて頂いたのです。それはまさに待ち望んだチャンスでした。父には海外旅行に行くと言って 10 日間の暇をもらい、渡英しました。そこでは実演したり、パーティーなどもし

てもらい、100万円ほど売ることができました。「親父、俺の言うことが正しいやん。海外いけるやん」と、鼻高々に帰国したのです。

次に、パリで出展する機会を得ました。場所はギャラリー・ラファイエットの地下食料品売場です。先方から「日本っぽいコスチュームを着てほしい」と頼まれ、作務衣を着て臨みましたが、3日販売してもサッパリ売れません。なぜなら忍者を連想させていたからです。そこで普通の服に着替えたら、売上が変わっていきました。その時、日本を忘れないといけなないと気付いたのです。日本を前面に出さない。そうでないと海外の日常生活の中に入ることはいけません。

それから5年ほど、海外の見本市で展示しました。その際、できるだけバイヤーでなくメディアの人としゃべるようにしました。パンフレットと名刺だけでなく、茶さじもプレゼントしました。帰宅して資料を出した時に茶さじが出てきたら忘れないでしょう。そして、僕からも「あげた茶さじ、使ってる？」といったメールを出します。それに返事が来たら、チャンス到来と、写真を送り込むなどして雑誌などのメディアに載せていただきました。1～2年目は「なんやこれ。極東の小さな店から来てるぞ。手づくりと言っても機械とどう違うの」などと言われていたのが、雑誌に載るようになった2～3年目から、「うちで売ってください」に変わってきました。そうすると、こちらの「言い値」で販売できるし、取引条件も優位にできます。

■言葉で教えられないことを大切に

その際に大切にしているのは、世界中に親戚をつくりにいこうという気持です。うちのお茶筒は、半年もすると変色する「邪魔くさい商品」なんです。それにしっかり向き合って、売ってもらわないとなりません。だから商品を理解し大切にしてくれる、親戚みたいな関係性ができあがり、それを世界中につなげていくようにしないと、広がらないと思っています。今はじわじわ、そういうことをしている段階です。

2014年、うちの茶筒はヴィクトリア&アルバートミュージアムのパーマネントコレクションとなりました。それは僕の夢でした。父はミュージアムの名を知りませんでしたが、連れて行って見せたら、「うちの缶は、俺が死んでもここにあるのか」と言って、とても喜んでいました。

そのほかの活動としては、杉本博司さんとのプロジェクトなどがあります。2014年のヴェネツィア・ビエンナーレで、杉本さんのガラスの茶室「Glass Tea House Mondrian／聞鳥庵」に茶筒を提供しました。杉本さんからは「ガラスの中なので、銀がきれいなんじゃないか」と言われたのですが、茶筒はブリキであり銀ではありません。「ブリキで銀を超えてこい」と言うのです。準備期間も短く、悩みに悩んだのですが、60年前の真っ黒くなった缶を見せたところ、「これなら唯一無二。銀は買えるけれど、これは絶対に買えない」と言ってもらえた。そこで、それをバラバラにして、お茶入れと茶杓などをつくって展示しました。

この経験で気付いたことがあります。僕たち工芸の職人は、アーティストと同じようなも

のづくりをしたら、あかんのちゃうかな、ということです。僕たちは1を2、2を3、3を4というように、工程を引き継ぎながら何かしら同じものをつないでいく、その部分が必要です。でもアーティストは違います。同じものを提示したらフェイクになってしまいます。ですから開化堂がアーティストと組んだものづくりというのは、少し控えているところです。

職人の世界は、「見て覚えろ」です。それは、一方的に言葉で教えられるようなものではないからでしょう。その言葉にできないところに、開化堂らしさというものもあると思います。その「らしさ」を次の代にどう渡していけるか。集中度合いを測れる眼鏡があるんですが、それを使うと、若手の方が集中力は高く、ベテランになるほどリラックスして仕事しているのがわかります。ふと、祖父の言葉が頭に浮かびました。「肩の力が抜けて一人前。毎日の仕事、そんなに肩に力が入っていて、ええ仕事ができるわけない」です。そういうところに、職人仕事の深さがあると思います。言葉にできないことをいかに次へとつないでいくか。次の代につなぐことができ初めて職人と言われてもいいのではないかと、思っています。ありがとうございました。

■細尾 1200年の歴史を背負う

細尾 八木さんが素晴らしいお話をしてくれたので、僕から言うことはあまりないかもしれませんが。京都から参りました細尾真孝と申します。私有家業を継いだのは9年前になります。弊社は西陣織の帯のメーカーで、京都の上京区という、安倍晴明の清明神社の裏手側にある西陣と言われるエリアの中で、今でも織物を織っています。本業は今でも呉服で、西陣の帯のメーカーであり、また人間国宝などの織り手による、いわゆる高級な着物を得意とする問屋業を営んでいます。

西陣の起源は1200年前、平安時代まで遡ります。京都が都だった1000年の間に、天皇や貴族、将軍家、神社仏閣など、ドメスティックな超アッパー層のためのテーラーメイドの織物をつくってきました。お金に糸目をつけずにひたすら美を追求し続けてきた、それが西陣の背景です。弊社は元禄元年1688年に本願寺の僧侶の袈裟を織ることとなり、そこから細尾という名字をいただいております。戦後はレディメイドのものが増えましたが、かつて西陣織は別名を錦織ともいい、「故郷に錦を飾る」の語源にもなっています。

弊社は2006年に初めて海外進出に挑戦しました。それは過去30年で市場規模が10分1まで減少し、90%が失われてしまったという厳しい現実があったからです。この先50年、100年と続けていくには、新しいマーケットをつくり出す必要があります。私有家業に戻る前よりメゾン・エ・オブジェに出展したのですが、一年かけて準備して、日本とわかるソファをつくったのですが、オーダーはゼロ。初の海外戦はヒットを一本も打てずに終わったと聞いています。

理由は2つあります。一つは生地幅の問題です。西陣織の帯幅は通常32センチと狭く、それでソファの張地にすると継ぎ目が出てしまいます。高級なソファで、継ぎ目があっては成立しません。もう一つは、弊社は織物のプロですが、ソファをつくるのは素人です。モノにしないと海外で展開できないと考えていたので、デザイナーを起用してソファをつくるのにも

困難が多く、惨敗したのだと思っています。

ここで諦めるわけにもいかず、翌年、またメゾン・エ・オブジェに出展しました。今度は狭い生地幅でも可能な和柄のクッションをつくりました。オーダーは入ったものの、わずか2件。私は、この頃、家業に戻りました。なかなか事業化できない状況でした。

■和柄を取り払うことで世界が広がる

転機は2008年にやってきます。パリ市のルーヴル宮内装飾美術館で「感性・日本デザイン展」という展覧会があり、弊社は本業の帯を出品しました。この展覧会は非常に好評で、翌年ニューヨークに巡回いたしました。2009年5月、巡回展終了後に、一通のメールが届きます。それはニューヨークの建築家ピーター・マリノからのもので、西陣の技術と素材で織って欲しいと、図が描かれていました。それは和柄ではありませんでした。マリノはクリスチャン・ディオールの旗艦店を全て手掛けていたので、西陣の織物を内装材とし、壁面や椅子の張り地にしたいといってきました。

これがひとつのきっかけとなりました。それまでは和柄じゃないと差別化できないし戦えない、モノじゃないと海外に展開できないと思い込んでいました。しかし、実際に注文されたのは素材としてであり、和柄を取っ払うことでした。和柄を取っ払った時に、本来、西陣が持っていた技術や素材が生きてくることに気付かされたのです。

「これからは、素材にフォーカスしていこう」となったのですが、一つ大きな壁がありました。それは生地幅の問題です。西陣で用いている織機は32センチ幅で、それでは継ぎ目が出てしまいます。最低でも150センチ位の幅がないと素材のマーケット、つまりテキスタイルの土俵には立てません。本業も厳しい時に、はたしてできるかどうかわからない織機開発に挑戦するなんて、と社内でも反対の声があがりました。しかし、父が後押ししてくれ、織機開発に挑みました。結果、1年かけてようやく150センチの幅の西陣織の技術と素材が使える織機が世界で初めてできあがりました。そこから一気に、広がっていったのです。

今では世界中のディオールの旗艦店はもとより、ブランドではシャネルやルイ・ヴィトン、エルメスなど、日本ではミキモトやザ・リッツ・カールトン東京などにテキスタイルを納入しています。

西陣織の工程は約20工程があり、高度に分業化されています。その一つ、西陣には箔という技術があります。本物の金や銀を貼ったシートを裁断し織り込むのですが、その箔を貼ったり切ったりするスペシャリストとしての職人技術も代々、西陣と呼ばれる約7キロ圏内で受け継がれてきました。箔の技術を活かしマリノの要望に応えましたが、この技術はファッションでも応用しています。ミハラヤスヒロさんとのコラボレーションでは、ダウンジャケットやスニーカーに使用されています。

■西陣織ならば複雑なレイヤーが可能

織物の定義は経糸と緯糸が交差するものであり、最も基本の平織は、経糸が上がり、緯糸が上がりというのを繰り返す、ワンレイヤーです。西陣は、世界で一番複雑なレイヤー、構造がつけられることが一つの特徴です。150センチの織機の中に経糸が9千本ありますが、これを一本一本プログラムでコントロールできるのです。多いものだと20~25のレイヤーを組み込めます。建築のように、糸一本一本がストラクチャーになっていくのです。織物でも光によって見え方が変わったり、ある角度にだけ見える色があったり、そういう複雑なことを全て計算でつくることも可能なのです。

黒川 西陣の帯地というと厚い気がします、薄くできるんですか。

細尾 ファッションの場合は、帯よりかは薄くしています。でも基本的には帯のテクニックと同じです。帯の素材である絹も、一般的に弱いと思われがちですが、実は強度があるのです。昔は米軍のパラシュートの生地は、日本の絹で織られていたほど強い。バッグのTUMIとのコラボレーションでは、絹を用い、厳しい機能基準を満たす、機内持ち込み用のバッグが生まれました。

テレジータ・フェルナンデスという現代アーティストとのコラボレーションも行いました。先ほど八木さんから、アーティストとの仕事は大変だという話がありましたが、彼女とのコラボレーションも大変なものでした。通常は仕事を重ねていくとある程度の着地点というか、80点のものを目指すのか90点まで上げるのかなど見えてきますが、彼女の場合はゼロか100なんです。

ドロ잉を渡され、「あとは任せたから。コンセプトを汲み取って、見たことがないものをつくってほしい」と。そこで、夏物の帯に使われる透け感のある紗という技法を応用して、表から見ると透けるけれど裏から見ると透けない織物を開発しました。結果として1年かかり、織機から開発するプロジェクトとなりました。実際にやってみると大変なことも多かったので、工房のメンバーはやりたがりません(笑)。アーティストはビジネスがベースではなく、ひたすら美を追い求め、新しいものを追い求めます。持ち出しも多くなるし、苦しく傷だらけになるんですが、終わってみて得られるものも大きいと感じます。

■最先端のテクノロジーと織物で未来を目指す

次は西陣織とバイオテクノロジーとの関わりについてお話します。段々、話が未来の方に向かっていきます。まず、アーティストのスプツニ子！さんとコラボレーションしました。生物科学研究所では遺伝子組み換え技術を用いて、クラゲのDNAを抽出し、それを蚕に組み入れる研究をしています。光る糸を吐く突然変異体をつくるのです。その糸を用いて、織物やインスタレーションをつくり、展示しました。もともとはグッチのアートプロジェクトの企画で、これは巡回展となり、ロンドンのヴィクトリア&アルバートミュージアムのパーマネントコレクションにもなりました。生物科学研究所では、他に蜘蛛のDNAを抽出して蚕に組み変えていく、スパイダーシルクの開発も行っています。丈夫な糸になるのです。ゆ

くゆくは、宇宙服や宇宙船にできるほどタフな糸にして、これを西陣の技術で複雑な立体に織り上げたいとか妄想しています。

ほかにも可能性は広がっています。例えば生体センサーを服に織り込めば、そのまま生体をスキャンすることも不可能ではありません。しかもセンサーは表出させず、美の中に隠しこんでしまうことができます。本田技研工業ともコラボレーションを続けており、例えば運転中に居眠りしたら自動的にブレーキが作動するとか、心臓発作を起こしたら自動的に病院に搬送するとか、自動運転車の未来に向けて、西陣の複雑なストラクチャーを織り込む可能性を探っています。また別の自動車会社は、車内が家電化することを考え、そのデバイスに西陣の技術を応用できるのではいかと期待されています。

西陣織は 1200 年間同じことをやってきたわけではなく、折々で最先端のテクノロジーを取り入れてきました。明治になると、天皇や貴族、将軍家が東京に移ったことでクライアントを失った西陣は疲弊しますが、その時、西陣の職人 3 名が新しい技術を求めてフランスのリオンまで命がけで渡欧しました。途中で船が沈み、1 名亡くなり、残った 2 名が持ち帰ったのが今の西陣を支えるジャカードです。織機に組み込み、経糸を自動で上げ下げさせる装置です。それまでは織物は、数人で織機の上に登り、人力で経糸を上下させていました。ジャカードは 1700 年代に生まれた装置で、パンチカードというボードに穴を開けた何千枚もの紙を用いて複雑な指令を出していきます。0、1 のコンピュータプログラミングと同じなので、織物がコンピュータの原型といわれる所以です。

西陣の織物は、このようにコンピュータとの親和性がとても高いので、山口芸術センター YCAM をはじめとしたプログラマーとのプロジェクトも数々行っています。通常、平織、綾織、縺子織という織りの三原則の組み合わせによって膨大な組織をつくりますが、人工知能のディープラーニングを用いて、プログラミングさせる試みなど、人智を越えた構造を生む試みなどを行っています。

■GO ON 伝統工芸を憧れの職種にしたい

細尾 では、最後に GO ON の活動についてお話します。前に進んで行く、未来に向かっていく、Going on と自分たちの先人から受け継いできた技術や素材への恩義の御恩をかけ合わせ名付けました。今年で 6 年目に入ります。メンバーは「京金網つじ」の辻徹さん、桶「中川木工芸」の中川周土さん、竹工芸「公長齋小菅」の小菅達之さん、「朝日焼」の松林豊斎さん、「開化堂」の八木さんと私の 6 名です。会社ではなくプロジェクトで、伝統工芸をあこがれの職種にしたい、活性化させたいと結成しました。それぞれ違うジャンルのメンバーが活躍することによって、「あいつらができるなら、俺たちもやってやろう」と思ってもらえることを目指しています。

伝統工芸はある見方をすれば斜陽産業なのですが、西陣も 1200 年国内だけでやってきました。つまり世界の人々が全く知らない技術と素材、ストーリーがそこにある。それはむしろチャンスなのではないでしょうか。

関 GO ON で何かプロジェクトを立ち上げたりしているのでしょうか。

細尾 はい、2年前からパナソニックとのコラボレーションを行っています。今年、ナショナルというブランドを立ち上げてから百周年なので、それを目指して進めてきました。家電が発達して、例えば炊飯器ができて桶の保湿が不要になり、伝統工芸が淘汰された側面もあったので、これまで家電メーカーはむしろ天敵でした。しかしこれからの100年、ものが溢れる世界で豊かさを考えた時に、伝統工芸と家電メーカーが目指すものは重なるのではないかと思うのです。私たちはパナソニックの家電ラボに参加し、通電性の高い箔を利用した外部環境とコネクする機器の提案などを行ってきました。昨年はミラノサローネで展示し、「ベストストーリーテリング賞」をいただいています。プロジェクトは今も継続しています。

八木 家電ではさまざまなプロトタイプをつくっています。その一つ、開花堂の茶筒の蓋を開けると音が鳴り出す、iPhone と連動したスピーカーも生まれました。これは実際に発売に向けて動き出しています。

関 面白いですね。

八木 開花堂の茶筒なので、手の中で使い込んでいくうちにどんどん味がでていくスピーカーです。家電は古くなると価値が下がりがちですが、逆に価値が上がっていくような家電を提示したいと思ったのです。テクノロジーと工芸とは相反するものもありますが、100年先は同じ方向を向いているのではないかと考えています。

細尾 日産自動車とのプロジェクトも進行中です。伝統工芸に千年もの歴史があるということは、過去を遡るだけでなく、より遠い未来も想像できることを意味していると思うのです。千年以上前からのプリミティブなものづくりを知っているからこそ、それを未来のテクノロジーや科学とどう融合させるか考えられる。人間にとって豊かな暮らしとは何か。そういう話が、パナソニックや日産自動車とのプロジェクトのベースになっています。

八木 本人はダイバーシティというか、横の変化や多様性を受け入れるのが上手です。一方、職人は縦の時間軸、背中に祖父や曾祖父を感じて、100年後の修理を考えてものをつくりまします。時間軸の中での多様性に長けており、そこにヒントが隠されていると考えています。

細尾 職人の技は、暗黙知です。僕も「見て覚えろ」と言われましたが、触覚研究の見地からするとその学習法は極めて論理的なのだそうです。では言語化できない部分をどうやって合理的意学習するか。例えばVRの技術を用いることで、職人が10年かかったことを体感できるようになれるかもしれない。医師研修の現場ではすでに導入されているようですが、技術の成功体験により、人の能力を高めることはできるはずです。テクノロジーとクラフトで、人間の潜在能力をどう上げていくか、そんなテーマにも未来を感じています。

Q&A

関 ありがとうございます。お時間が余りないのですが、ご質問やご意見をいただきたいと思えます。

Q1 テクノロジーとの接点が切実でもあり、興味を持ちました。僕は建築家なのですが、今後、AIに人間の仕事が奪われる、絶滅危惧種と言われます。それに対してお二人はどうアプローチされていますか。

八木 その絶滅危惧種の最たるものが伝統工芸だと思います。でもAIなど世の中の流れがそちらに行けば行くほど、人間の根源的な部分を求める思いは強くなる。先ほどのiPhoneに連動したスピーカーもそうです。蓋を開けた瞬間や音に何か感じるといった部分が、これから逆に大事になっていくのではないのでしょうか。

細尾 最終的な美をピックアップするのは人間です。僕自身、何が西陣で何が西陣ではないかと考える時、「美」を考えます。西陣は、人が美しいと思うものをひたすらつくり続けてきました。それは変わらずに人間が担っていくことだと考えます。

Q2 新しいことを起こそうとする、その駆動力、起爆剤は何ですか。

細尾 僕は家業がコンサバティブに思え、当初は継ぐつもりはありませんでした。でも西陣織がクリエイティブであることをある時、自分の中で実感できたことから変わりました。その後は、いろいろな方とのコラボレーションや、職人、アーティストなど、クリエイター同士のキャッチボールが原動力となっています。つまり、クリエイションがモチベーションです。経済的なシステムも含めて、次の世代、未来に、伝統工芸のバトンを渡したい。それがGO ONの取り組みの軸にあります。

Q3:関 GO ONとしてこれから挑んでみたいテーマはありますか？

八木 まず、子供のためのワークショップを世界各国でやっていきたいですね。つくるまでの過程を知り、その価値をきちんと世の中の人に見てもらえるようなことがしたいと考えています。

細尾 日本は世界一のクラフト王国です。世界を少しでも引っ張っていき、どうバトンをつないでいくか、どう普及させるか。関係性をつくっていくことに興味があります。

関 最後に黒川さんにまとめていただこうと思えます。

黒川 真孝くんの「東京の親父」と自負していますので、あえて耳の痛いことを言います。活躍をうれしい思いで聞いていましたが、反面、僕にはまだ自分の命をどこまで爆発させる

か、必死になってトライアンドエラーをしている過程に思えました。人間は記憶に引きずられながらも、前に向かって生きています。僕はこれを「記憶と願望の狭間に生きている」と表現しています。あなたたちの仕事は、典型的に伝統という記憶と革新という願望との狭間で闘っている。伝統工芸の皆さんが、新しい人材と出会っているだけで、まだ融合はしていない。融合するのがいいのかどうか。これはまた、ひとつのテーマとして議論しなければいけないことでしょう。出会っていてその特異性や面白さに多くの人たちが感動し、賞を得たりしているかもしれない。でも僕には、記憶と願望の狭間に生きる苦悩が見えてきません。僕も昔、そんなことやっていたんだ。ただ、あなたたちは、自身が伝統工芸の人で、自らの発想とエネルギーでデザイナーでなくサイエンスと組んでいるところに、何か新しい可能性を感じます。挑戦の半分は失敗と思いながら、闘ってほしい。さまざまな失敗をしながら、あるいは成功しながら、人生は動いていくんです。親父の立場からですね、「まだまだ、こんなんで喜ぶなよ」と言っておきます。本日はありがとうございました。

以上

2017 年度 第 11 回物学研究会レポート

「伝統産業をクリエイティブ産業へ」

細尾真孝 氏（株式会社細尾 常務取締役、GO ON メンバー）

八木隆裕 氏（開化堂 6 代目、GO ON メンバー）

写真・図版提供

01；物学研究会

編集=物学研究会事務局

文責=関 康子

- [物学研究会レポート] に記載の全てのブランド名および商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
- [物学研究会レポート] に収録されている全てのコンテンツの無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1998～2018 BUTSUGAKU Research Institute.